

序

懸案の『木器集成図録 近畿古代篇』をここに世におくることができて大変喜ばしい。発掘調査で多量の木製品が出土したのは昭和十一年暮から翌年春にかけておこなわれた奈良県唐古遺跡の発掘であった。その当時中学生であった私は十一年の早春に他界した森本六爾が今年存命であれば、弥生時代の鍬、鋤、杵をはじめとする農具を見ることができたであろうと関係者が話をしているのを聞き、また出土直後の精巧な高杯杯部を見せられた感激を今でも忘れることができない。

唐古遺跡出土木器は早速石膏型や木で複製をつくるなどの処置はされたが、実物は水漬状態で半世紀近く保管されてきた。戦時中に水を替えることもままならず黴がはえるなどひどいこともあったが、昨年当研究所と京都大学考古学教室の共同研究で P.E.G 含浸と真空凍結乾燥を混用する新方式で処理が進行中である。唐古出土木器の現状が出土木製品の保存処理の歴史を物語っているのである。

戦後登呂をはじめ多量の木器が全国各地で出土したが、昭和三十五年に平城宮跡で木簡が出土したことから、出土木製品の処理に本格的に取り組まざるをえなくなった。その後十年、関係者の努力によって保存処理方法は確立し、文化庁も指導につとめ、処理施設なども拡充し処理の補助金を出すなどしてきたが、何分にも経費その他の制約で、その処置は未だ緒についたという状態である。一方全国の開発に伴う大規模発掘で出土する木器は膨大な数にのぼり、ほとんどが、とりあえずの水漬保存では十分な研究もできない状態にある。これを克服するため都道府県の枠をこえた『木器集成』を望む声が強くなり、当研究所の御世話でとりあえずの型をつくることになった。手はじめに近畿地方の古代を取りあげたのは便宜的なもので、今後時代別、地域別に順次資料の整理できたものを刊行する予定である。本資料がささやかながら学界に寄与するものとなったと自負しているが、編集にあたって、縮尺・表現の統一、材質の同定など当事者の苦労は大変なものであった。この企画に賛同され協力していただいた方々に感謝の意を表し、今後各方面の御協力を心から願うとともに、本事業の完成の一日も早からんことを祈るものである。

昭和六十年二月五日

奈良国立文化財研究所長

坪 井 清 足